

## 1. PRA の現場での活用

PRA は現場で活用されて初めて意味を持つてくる。

どんな名刀であろうと、神棚に飾っているだけでは役に立たない。最初はなまくら刀であっても現場で使いながら研鑽を重ねることで有効なツールとなっていく。

日本国内においても、既に停止時 PRA は、定期検査を安全に進めるために活用されている。お釜のふたが空いていて、バウンダリが少なくなっている停止時の方が意味リスクが高いので、有効に活用されていると考えているが、これらの日本国内における検証はどのようになっているのかを知りたい。停止時 PRA の有効性評価及び PDCA の例があれば示してほしい。特に現場のマネジメントにおいて、停止時 PRA の改善成果を、電力全体で共有していただきたい。具体例があれば次回示してほしい。

今回、伊方の PRA についての検討成果が報告されると聞いている。これらが、具体的に現場でどのように活用されているかを知りたい。特に、停止時 PRA に反映し、次回定期検査に向けて、マネジメントの改良をどのように進められているかを示してほしい。

神棚に飾っているだけでは無意味である。

また、福島事故は、シナリオベースの PRA の限界を提示した。シナリオもしくは前提の不確かさの考え方を検討していくことが必要である。どんなに考えても、事故はシナリオ通りには起きない。シナリオ通りに起こればそれは事故ではない。現場対応に PRA を反映する場合には、シナリオベースにならざるを得ない。しかし、そのうえでシナリオや前提の不確かさを含めた机上訓練などにも、積極的に PRA を活用することで、その限界を知り、経験値を高めることで事故対応能力の充実を図る事が重要であると考え。

## 2. レベル 3 PRA

福島事故を受けて、IAEA SF-1 に示された「人と環境を守る」重要性が再確認されている。従来のレベル 3PRA は、人を守る事が主であったが、「環境」を守るレベル 3PRA に関する議論を教えてほしい。

## 3. 再処理施設への展開

政府はもんじゅ廃炉を決断するとの報道があり、国民から見れば、核燃料サイクルをやる決断を政府が行うように見えるが、現存する再処理施設に関する PRA を現実的な形でどのように展開するかを明示してほしい。

#### 4. 新型炉への展開

第4世代炉などの新型炉に対する PRA の強化が重要である。特に、地震に弱いアストリッドなどの大型タンク型高速炉では、地震 PRA の充実が必須である。また、高温ガス炉などは炉心溶融が現実的に難しいため、CDF の計算結果に意味がなくなる。いわゆる第4世代炉では、レベル3 PRA が重要となってくることが予見されるが、これに対する準備が必須である。